

音楽科の授業を基盤とした豊かな全校合唱の創造

～授業と集会活動での『感動ある合唱体験』を通して生徒の変容にせまる～

鞍手地区教育研究所

宮若市立宮田中学校

教諭 計良洋美

主題の意味

1 「音楽科の授業を基盤とした豊かな全校合唱の創造」

音楽科の授業が授業の中だけで終わるのではなく、適切な指導の中で、学校生活の中に広がっていく。さらにその音楽が家庭の中や地域社会にまで、広がっていくことを願って本主題を設定した。

授業の中で培われた感受性や基礎的・基本的能力を発揮して、全校音楽では、より豊かな表現ができる。そこで得た感動から、授業へと還元できる仕組みを考えた。こうして獲得した音楽的な能力や技能は、生徒の学校生活だけにとどまらず、家庭や地域社会の中まで拡がり、連帯感や協調性を大切にしている心が育ち、切磋琢磨の中で自分を育てる信条が身につくと考えた。

2 サブテーマ

～授業と集会活動での『感動ある合唱体験』を通して生徒の変容にせまる～

《授業から全校音楽へ、広がったり、深まったりするキーワードは、生徒一人一人が享受した「音楽的な感動」の体験が、その中核となる。》

授業の中でみんなが歌い合唱した喜びや感動が、音楽集会の活動の中で更に大きな喜びとなる。大きな集団による合唱体験の共有は、一人一人の生徒が心を動かし、さらに質の高い音楽的感動を求めるようになりやすい。

ここに自ら感動を求める生徒が、自分から進んで音楽表現活動に取り組もうとした時、自主性が生まれ、自己表現力が高まる。さらに、みんなと合唱する喜びから共感性や協調性が育ってくる。その上、共に感動できる美しい合唱を表現しようと工夫する時に、創造性が生まれてくる。このような活動の課程の中で、生徒の変容が現れてくると考えた。

研究の仮説

1 自主的、自発的、創造的な音楽活動をする生徒を育てるために

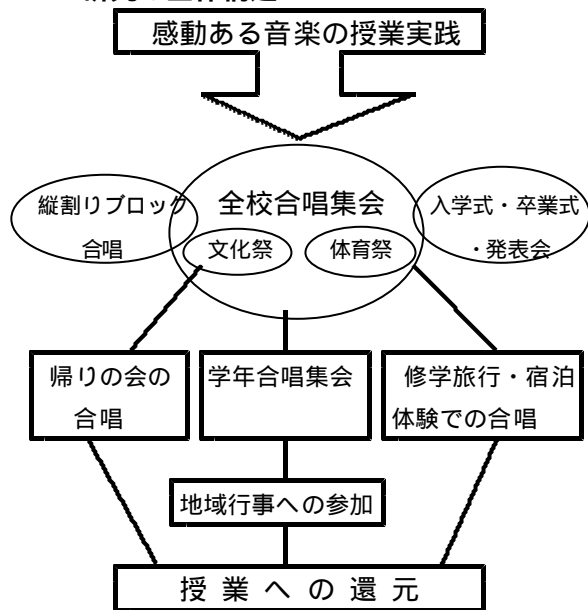
(A) 基礎的・基本的な技能を習得する、自発性をうながすステップを明確にする。

(B) DTMソフトを活用した、個人練習とパート練習を行い、個々に適した指導をする。

(C) 集会活動により、生徒の主体的音楽活動を位置づけ、発表の場を持ち、集団による感動的合唱体験を共有することによって交流の輪を広げる。

仮説の検証にあたっては、授業を基盤として、A、Bの検証を行い、授業の中で体験した感動を“転移力”として、全校集会へ連続させながらCの検証にあたった。このような手だてをとることによって生徒に自主性が身につく、主体的、自発的な活動ができる生徒が育つであろうと考えた。

2 研究の全体構造



3 研究の内容

- 研究仮説とその実証にあたっての着眼 -

(1) 仮説の(A)具現化にあたって

基礎的・基本的な技能を習得する、自発性をうながすステップを明確にする。

(2) 仮説の(B)の具現化にあたって

D T Mソフトを活用した個人練習とパート練習を行い、個々に適した指導をする。

(3) 仮説の(C)の具現化にあたって

集会活動により、生徒の主体的音楽活動を位置づけ、発表の場を持ち、集団による感動的合唱体験を共有する。

授業で培った音楽性を発展させ、全校生徒による新たな、感動の場面を設置し、感動の輪を広げて行きたい。

さらに、その感動を授業に還元するサイクルを確立させたい。

定期的な合唱集会、始業式、終業式、入学式、卒業式等の学校行事に関わる集会の中にも常に学年合唱や全校合唱を取り入れ、授業で身につけた基礎能力を活用しながら、感動の輪を広げたい。

4 研究の年間計画(別紙資料参照)

研究の実際

1 仮説(A)の検証(別紙資料参照)

- 宮田中学校2年生における検証授業 -

基礎的・基本的な技能を習得する、自発性をうながすステップを明確にする。

(1) 生徒の自発性や主体性を生かす授業の視点

H S M (Head Start Music) を生かして、自主的自発的な表現を重視する。

~ 「夢の世界を」を中心として、生徒の指揮、ピアノ伴奏で合唱する。~

曲の構成に着眼して、速さの変化と強さの変化をキーワードとして「時の旅人」を合唱する。

~ 曲想を確かめながら表現の工夫をする。~

発声のしかたを身につけ、腹式呼吸を生かした伸びる頭声的発声で歌う。

2 仮説(A)の考察

Head Start Music で生き生きとした表現ができてきた。特に「夢の世界を」で

は、生徒の指揮及びピアノ伴奏がよく、生徒はよくのった歌い方をしていた。この HSM の日常化が定着してきていると感じた。

基礎的・基本的な技能は、生徒自身が必要に迫られ、自ら求めようとするのが大切である。この授業においては、歌い出しの力強さの表現をもっと出したいという欲求から発声のしかたについて指導をした。

体を柔軟にして自然な呼吸を下腹部がふくらむように入れる。腹筋の支えを十分とって両足の親指に力が入るようにして、呼吸を出す。そして、身体全体が伸びるようにしながら歌い出すのである。横隔膜の下から声を上に伸ばそうということで生徒の歌声が変わってきた。

範唱を聴いて、曲の構成を捉えることができた。

基礎的・基本的な技能の練習を自主的・自発的にするために、基礎訓練は、今やっておくと将来役にたつから、今は、きつくて頑張りなさい。よくできたら早く帰して(解放)やる。できないものは、残して(拘束)する。という考え方は過去にあった。

~ をさせられる。やらせられる中で歌ったり演奏したりすることはしんどい。

あるフレーズの表現がなかなかできない。友だちから教えてもらったうまくできた。だんだん自分の思うようにできてきた。おもしろい、楽しいという活動の中で、活動には意欲がでてきている。

みんなで合唱をした。その時感激した、感動した。あの思い出をもう一度味わいたい、という意欲は、再表現・再々表現もいとわない。もう一度もう一度と、自分の課題へ向かって表現を繰り返し、繰り返しして、ほんものの表現を求め続ける。

この力は、自己教育力ともいえる。

音楽科での新しい学力観は何かと考えると、J.S.ブルナーの「教育の過程」にある『転移力』ととらえることはできないだろうか。音楽科で、生徒の技能をみると、一つのことができるのと他のことへも連動して移転する力が見えてくる。はじめの学習があとの

学習を容易にするための関係を考えて、歌うこと（合唱）ができると演奏するときにも歌うように弾いたり吹いたりする力が伸びてくる。アンサンブルについても感覚的に主旋律を生かしたハーモニーを形成するようになる。転移力とは、質を量にするが、歌うこと（合唱）ができると共に合わせる喜びや、もう一度やろうという内発的な動機が高まってくる。それは、個性的ではあるが、次へのエネルギーとなると考えられる。

合唱をして感動を得た生徒は、自分たちでやるうとして教師がいなくても教え合いや歌いあわせをはじめ。自主的・自発的に歌い合わせたり、教え合ったり、繰り返し練習したりすることができる。

この姿を自主的、自発的、創造的な活動ととらえることができるのではないかと考えたのである。自発性をうながすステップは次の図のように考えている。（別紙資料参照）

3 仮説（B）の検証（別紙資料参照）

- 宮田中学校2年生における検証授業 -

DTMソフトを活用した、個人練習とパート練習を行い、個々に適した指導をする。

(1) 自主的・主体的な音楽活動を行うためには、楽譜や楽典の知識が必要であるが、現行の授業数では、全ての生徒に、その力を付けることは不可能といえる。

しかし、DTMソフトを使った授業を行うことによって、生徒は音楽に対する興味・関心を失うことなく、楽典の力や、読譜力を身に付けることが、出来ると考え、混声4部曲「カンタータ“土の歌”より大地讃頌」をDTMソフトを使って入力し、さらに、その音源を使ってパート練習を行うことを試みた。

4 仮説（B）の考察

宮田中学校の生徒は、1年生時より総合学習の時間を使って、パソコン活用のための授業を実施している。そのために、操作自体には、全く抵抗がなく、むしろパソコンを活用した授業を楽しみにしている。

音楽科でのパソコンを使用したDTMの授業に対しても、生徒は主体的・積極的に

取り組むことができた。

また、当初のねらい通りに、楽しみながら、感覚的に楽譜や楽典にも興味を示し、短い時間で、大地讃頌の構成や他の声部との関わりを把握していた。

これまでの黒板や手書きの楽譜で練習をする授業と飛躍的に授業効率が上がっている。

5 仮説（C）の検証（別紙資料参照）

- 宮田中学校全校生徒による検証 -

集会活動により、生徒の主体的音楽活動を位置づけ、発表の場を持ち、集団による感動的合唱体験を共有することによって、交流の輪を広げる。

宮田中学校全校合唱指導（別紙資料参照）

（新入生説明会・研究発表会）

・曲目 「翼をください」「大地讃頌」

6 仮説（C）の考察

「新入生説明会」冒頭での全校合唱は、平成16年11月12日に行われた「宮田中学校研究発表会」での全校合唱と同様に、大きな拍手と感動を巻き起こした。会場の感動は生徒に伝わり、生徒自身も深い感動を味わった。

ここでは、全校生徒と、宮田中学校を訪れた人々との深い感動の交流があったと思われる。また、昨年は会場で鑑賞していた、現在の1年生の感想には、「これで自分も宮中の一員になったような気がした」というものもあった。

この結果から、生徒相互、生徒と教師、生徒と地域の間関係を合唱により連携させる試みとして次のようなことを考えた。

個はより楽しい、より快い、より美しいものを求める存在である。

ア：苦しいことより楽しくおもしろいことを求める。

イ：不快なことより、快適なものを求める。

ウ：醜いものより、美しいものを求める。

交流を集団の中で考えるとき

ア：自由性・開放感・あたたかさのあるとき交流がよくできる。

イ：共通の目標・協同の活動があるとき交流がよくできる。

ウ：生徒相互は、気が合う、心が通いあう、助けられた、救われた等の時、交流が深まる。

エ：生徒と教師は、好き、認められた、褒められた、理解してくれている、信頼されているというとき交流が深まる。

交流を求める条件

ア 承認の欲求が充足された

イ 認知の欲求が充足された

ウ 許容の欲求が充足された

エ 賞賛の欲求が充足された

オ 信頼の欲求が充足された

このような場合は、合唱活動の中で生まれやすい。

仮説(C)の検証のためのその他の取組 (別紙資料参照)

- 宮田中学校3年全学年合唱による検証 -
- 宮田中学校卒業証書授与式による検証 -
- 鞍手地区内小学校での検証 -

過去の実践例(別紙資料参照)

宮田中学校での合唱集会

昭和57年(1982)から、平成2年(1990)までの9年間、宮田中学校に在籍し、音楽科の教諭として授業を行ってきた。当時は現行の倍程度の授業時間があり、基礎基本を重視した授業を行いながら、発展的な授業を行うに足る時間数が確保されていた。

また、HSMの後には、教師の指導で発声練習を行っていた。2年生の後半からは、ア・カペラの曲にも取り組み、いつでも、どこでも合唱ができる能力を身につけさせることができた。エトピリカでは、合唱コンクールの課題曲として取り組んできた曲を、初めて学年合唱として歌う指導を行った。

課題曲に対して、独自の解釈を行い、他のクラスとは一味違う音楽を創ってきた生徒達、ある意味ライバルどうしであったクラスが、今度は学年の合唱として、学年の色を出そうとしている。

また、吹奏楽部の伴奏で、2年生と3年生が大地讃頌を演奏している。吹奏楽部の部員に対しては、学校外の音楽活動以前に「学校

内の音楽活動」を大切に考えるように指導してきた。授業中のパート練習や異学年での練習の時には率先してリーダーシップが取れるように指導してきた。

宮田西中学校における合唱指導と「創作ミュージカル」

平成3年(1991)から赴任した宮田西中学校では、これまでの合唱指導法に新しく、ミュージカルの指導を始めた。

授業と集会での発達のステップを活かしながら、「歌って、踊って、演技をする、しかも、ストーリーも曲も、オリジナルで行う。」「全校生徒で行う創作ミュージカル」このような目標を立てて授業に望んだ。

当初は、選択授業の範囲で行っていた「創作ミュージカル」は、文化祭の場が唯一の発表の場であったが、平成7年度(1995年)「宗像ユリックス」で行われていた「成人大学」の招待を受けて、宗像ユリックス大ホールで2000人の聴衆を前に全校生徒で披露することができた。さらに、この年の「もう一度招待したい演奏」の第1位に選ばれ、平成9年(1997年)にアンコール公演も行うことができた。

生涯学習としての実践(別紙資料参照)

研究のまとめ

再度赴任した宮田中学校は、荒廃した状態で、授業に参加しない生徒を音楽室に連れてくることから始まった。集会等を行うこと自体が困難な状況であった。しかし、校長を中心とした全教職員の血の滲むような努力で、再び、合唱活動の盛んな学校に再生した。

1年、2年生は、「自分達も先輩のように歌いたい」、3年生は、自分達が創り上げた「感動ある合唱」が、聴衆に感動を与えたことに満足をし、より大きな感動に向けて、練習に励む気持ちを表している。

音楽科の指導は、音楽科だけの問題ではなく、学校全体の教育体制が大きく影響する。

そして、本研究も、学校再生の一助になっていること確信する。